

三樹陽介 提出 学位申請論文（課程博士）

『首都圏方言アクセントの基礎的研究』 審査要旨

論文内容の要旨

本論文は第1部「方法論編」と第2部「記述的研究編」との2部構成、5篇23章に「記述的研究編の射程」「おわりに」「参考文献一覧」「調査について」からなる。

東京を中心とする首都圏で現在広く話されていることばを「首都圏方言」とし、東京及び東京周辺地域諸方言とそのヴァリエーションを広域方言としての首都圏方言としてそのアクセントの特徴を論じたものである。具体的な調査対象範囲としては東京都（島嶼部を除く）・埼玉県・神奈川県・千葉県の東京都に接する地域・山梨県の郡内地方である。

第2部「記述的研究編」は、本論文で定めたテーマ・視点に基づき首都圏各地のアクセントを記述し、そのデータを基に首都圏方言の実態を論じたものであり、本論文の中核をなす部分である。

第1部「方法論編」は本論文における調査法などについて概略的に示す。先行研究にそってアクセント表示の方法、研究史・東京語成立史・首都圏方言の捉え方、などを整理した。

第1篇「研究の概要」では、アクセントの表記とアクセント観を平山輝男（1957『日本語音調の研究』明治書院）に従うとする。アクセ

ント記述のレベルについては定説に従い、音韻論的解釈は、アクセントの「下がり目」を“] ”を用いて示した。

次に首都圏の言語特有の問題点として「言語意識」と「東京の範囲」をあげ、首都圏の話者が住んでいる地域の方言を話しているとの自覚がなく、漠然と共通語を話していると思っていること、東京の範囲の拡大に伴い地域方言を維持する社会的基盤が脆弱となり、これらのことばを包括する概念が必要であることなどを述べた。

第2篇、第1章では東京語アクセント研究史を整理し概略を示した。第2章では首都圏方言を都市言語として捉えるという観点から、東京が成立する過程を江戸幕府開幕から概観した。第3章は首都圏方言の諸相について論じた。

第2部「記述的研究編」が首都圏の地域方言の実態調査に基づく記述的研究である。第1篇「東京方言アクセントの変化に関する研究」、第2編「山梨県上野原市方言アクセントに関する研究」、第3編「東京周辺部のアクセントに関する研究」の、3篇18章からなる。

第1篇では東京方言のアクセントの変化に関する主な先行研究についてまとめた。東京方言アクセントには研究史上長く取り扱われてきた問題がいくつかあるが、それらについて着目し論じたものが中心となっている。

第1章ではこの研究の視点についてごく簡潔に述べた。

第2章では東京方言若年層話者のアクセント体系を記述した。これによって東京方言の若年層の現在の実態が把握できる。また、品詞や拍数ごとに分類し、所属語彙の検討を行っているが、老年層と若年層

に於けるさらなるデータが必要である。

第3章から第5章までは東京方言の終止形が3拍の形容詞アクセントの類の統合について検討している。東京方言では終止形が3拍の形容詞のⅠ・Ⅱ類の型の統合が指摘されている。Ⅰ類「赤い（平板型○●●）」とⅡ類「白い（中高型○●○）」と対立が失われ、終止形においてⅠ類がⅡ類の中高型○●○に統合するといわれて久しい。しかし、若年層においてはその変化はあまり進んでいないことが明らかとなった。

東京方言形容詞の類の統合は、活用形ごとに変化のスピードと統合する型に差があることを指摘した。

若年層においても、東京方言形容詞アクセントはⅠ・Ⅱ類が統合に向かう傾向はみられるものの、まだ完全に統合が進んではいない。

拍数の少ないものほど統合しにくく、また活用形別にみれば連体形が統合しにくく、終止形のほうが統合が進んでいることは、従来の説を裏付ける結果であった。拍数が長いものほど平板型が劣勢で起伏型に統合していることも先行研究の指摘の通りである。

拍数が長い語でも終止形が3拍の形容詞の場合と同様、連体形では統合があまり進んでいないことなどが明らかとなった。これは文法的機能を反映したものと考えられる。

言い換えると、形容詞アクセントでは語幹末にアクセント核がおかれる形での統合が進んでいる一方で、Ⅱ類の連用形「-タ」形・連用形「-テ」形・假定形では、Ⅱ類がⅠ類へ統合する変化が進んでいる。

第5章では年代差についてみている。東京方言において中・高年層

の調査を行い、若年層の調査結果と比較した。それによって若年層でみられた傾向が、他の世代でもみられることがわかった。

第6章はいわゆるA型・B型アクセントの問題をとりあげた。本論文では4拍語に限らず6拍語までを対象とし、尾高型と非尾高型という捉え方で語構成ごとに整理している。

本論文では若年層の調査で尾高型で発音されるものはごくわずかで、ほとんどが非尾高型で発音される。起伏型の語のアクセント核の位置は語構成が関与し、前部要素と後部要素の形態素の切れ目の拍か、後部要素の1拍後ろの拍にアクセント核がおかれる傾向があり、それ以外の位置にアクセント核がおかれることはほとんどない。アクセント核を持たない平板型については、明確な要因はわからず、語構成はアクセント核の位置決定に関与しないと説く。

第7章では首都圏方言若年層話者の個別の単語ごとのアクセントの型のバリエーションを丹念に整理した。アクセント辞典との比較から、首都圏方言の若年層話者は辞書掲載のアクセントとは異なるアクセントで発音することを確認した。これは首都圏方言の若年層話者のアクセントの実態を詳細に報告するもので、東京のアクセントは個人差があることを若年層の調査を通して具体的に示したものである。

第8章では若年層話者の言語意識について多人数アンケート調査を行い、共通語意識などについてまとめた。

第2篇は山梨県上野原市方言アクセントの記述的研究である。上野原市方言アクセントには、東京方言アクセントの古相を示すものがみられるという仮説を検証している。

上野原市は、都心部への通勤・通学圏内にあり、大月・甲府など山梨県西部とのつながりよりも東京都とのつながりの方が大きく、歴史的にも関東生活圏の西限であった。

上野原市方言では尾高型で発音される語が多いのが特徴である。東京方言では尾高型が衰退傾向にあることから、上野原市方言が東京方言の古相を示していると解釈している。

第3章では単純和語3拍語に着目し、東京方言アクセントの古相を示すことを実証的に論じた。

第4章では複合動詞アクセントについて論じた。前部要素が起伏式でかつ3拍以上の語の場合は前部要素のアクセントが複合語全体に反映されること、起伏式でかつ2拍以下の場合は原則平板型となること、前部要素が平板型の場合は原則中高型となり、その場合、原則的には後部要素のアクセント核が複合語全体に反映されることなどを論じた。

また、このアクセント規則には年代差もみられ、さらにもう一段階古いと考えられる例、すなわち前部要素が起伏式で、かつ2拍以下の場合でも前部要素のアクセントが複合語全体のアクセントに反映される例や、反対に、前部要素が起伏式の場合は3拍以上でもすべて平板化する、一段階アクセント変化が進んだ例も示した。上野原市方言アクセントにおける複合動詞アクセント規則と変化過程について論じた。

第5章は上野原市方言の複合名詞アクセントについて述べた。上野原市方言の複合名詞では後部要素が動詞連用形からの転成名詞である場合、ほとんどの語が尾高型で発音される。また、動詞からの転成名詞単独の場合でも同様である。先行研究にあるように特定の語が末尾

に付いた場合には尾高型になることも指摘した。複合アクセント規則が、上野原市方言ではそれが東京方言以上に厳格に適用されて運用されていることなどを論じた。

第6章は上野原市方言形容詞アクセントにおける類の統合について扱った。上野原市方言では伝統的なアクセントの型の対立を保っていることを示した。

第3篇は東京周辺地域のアクセントについての調査をまとめた。

神奈川県小田原市方言にも東京方言の古相を示すと思われるアクセントがみられるが、上野原市の場合とは異なる部分もみられる。埼玉特殊アクセントについて若年層の調査結果から論じているが、共通語化し東京式アクセントの体系を持つ若年層話者においても語的に埼玉特殊アクセントの干渉が見られることを指摘した。3拍語に注目して論じている。

第4章は東京都檜原村の方言アクセントについて論じた。上野原市方言と同様尾高型が多く聞かれ、一方で伝統的なアクセントであるとされる、アオ] バ (青葉)・ナミ] ダ (涙)・マク] ラ (枕) など中高型はほとんど聞かれず、両方言の差異が明らかとなった。また、上野原市方言の漢語字音語では、クーキ] (空気)、ホ] ーゲン (方言) といった特徴的な発音が行われているが、そうしたものは檜原村では聞かれなかった。一方で檜原村方言では上野原市方言と同様に無声化が起りにくいためアクセントシフトが起らず、結果的に上野原市方言と同じ音声実態となることがわかった。

巻末に協力者である話者の方々の一覧、首都圏方言研究に関連ある

詳細な文献リスト一覧を付している。

学力確認の要旨

申請者三樹陽介による首都圏方言アクセントの基礎的研究は、首都圏方言という新しい方言区域の設定をもとに東京とその周辺アクセントの調査研究を行ったものである。本論文は第1部「方法論編」と第2部「記述的研究編」との2部構成、5篇23章と「おわりに」「参考文献一覧」からなる。

東京語アクセントは日本語の話ことばの標準として、教育、放送などのすべての規範となるアクセントとして期待されるアクセントである。特に国際化が進んだ現在、東京アクセントの詳細な研究は、日本語音声の基礎研究としてのアクセント研究のみならず、スタンダード日本語、日本語教育などの実用的な方面からもその成果が求められている。本研究はそのような社会的要請に合致するものである。申請者三樹陽介は東京アクセントのネイティブスピーカーであり、東京式アクセントの聞き取りは正確である。

方法としてユニークな点は、首都圏方言という方言調査地域を設定するところである。東京方言はスタンダード日本語の基盤でありながら従来の方言研究の手法だけではとらえきれない特徴を持つ方言であった。すなわち、話し手がはっきりしない、話し手の住む地域が曖昧でグレーゾーンの幅が大きい地域であるという2点である。東京都に

住む人々は1300万人余で属性も経歴も様々である。従来の言語地理学では各小字では一人の人がその集団の方言を代表できるという仮説があった。しかし東京では典型的な東京方言の話し手を見つけるのは難しいのが実情である。東京という地域についても都心近郊に新しく居を構え都内に通勤通学する人々の意識は「東京語の話し手」であり、埼玉や千葉神奈川の方言の話し手であるという意識は薄い。このような人々が新しいスタンダード日本語の話し手であるという前提に立脚している。

従来の東京アクセントは、23区内で生育し戦前までに言語形成期を終えた人で典型的な山の手方言の話し手とその規範とされていた。しかし、東京アクセントはそのような狭い範囲での話ことばとしては規範を支えるだけの人口がない。昭和40年代以降、特に多摩地区を含む東京都とその近県、神奈川、千葉、埼玉地区に住みながら東京に通勤通学をする人々が東京アクセントの話し手となっている事はすでに先学から指摘されている。この地域全体を東京アクセントをしてとらえようとする点が新しい。

1部1編は、東京都内のアクセントの記述的研究である。

まず、東京都西部方言の若年層のアクセント体系を記述する。

次に、従来の研究で指摘されてきたアクセントの問題を正面から取り上げている。それは、3拍形容詞の平板型と中高型の統合の問題である。本研究は伝統的なアクセント研究の手法である類別語彙の型の統合を扱うが、活用形や多拍語の形容詞にまで目配りをしたところから東京アクセントの体系への観察へと視点が広がっている。また昨今

の音韻論的研究では扱わないアクセントの歴史研究から出発して系統を探る類別語彙の統合にまで目配りを聞かせている点が新旧のアクセント研究の古きをとりて新しきを伸ばす手法となっている。

比較言語学の流れをくむアクセント研究では類別語彙の統合が中心的な課題となるが、アクセントの型が平板型から起伏型へ形容詞のアクセントが変化していく流れの中で捉らえられている。音韻論的研究ではアクセント核の変化に目を向け歴史的変化については中心的な研究課題ではなく、おざなりにされていると言ってもいいような状態であった。

次に4拍名詞のいわゆるA型・B型の問題を扱う。「雷」のような語が、伝統的な東京アクセントの中で尾高型と中2高型の二つの型をもつことについて、古くから東京アクセント研究者の間で注目されてきたが、決定的な結論を見るに至っていない。これを4拍以上の多拍語に調査を広げ整理をした結果を検討して、複合語のアクセント規則で解釈しようと試みている。明解な解釈は導き出せなかったが、これは、東京アクセントにおいて名詞の多拍語に尾高型のアクセントが減少する変化を併せて考察することを目指している点に新しいアクセント研究への指向がみてとれる。複合語の語構成によってアクセント核の位置を決定する規則の顕在化を予測しようとしているが、この問題は東京アクセントの変化の方向を予測しようとする大きな問題を含んでいるので、この観点からだけではこの問題は解決しきれないと思われる。さらに一アクセント化や単語としての熟合度を考慮した文法的観点からの新しい視点等の切り口が必要であろう。

また東京都内の若年層のアクセントを丁寧に調査してアクセント辞典との差異を示したところは東京アクセントの多様性を視野にいたした意欲的研究の芽生えといえよう。

2編は、東京都の近隣地域の方言である山梨県上野原方言アクセントの記述をしている。丁寧な記述的研究により山梨県上野原市方言が東京方言の古相を示していることを明らかにした。また、山梨県上野原市方言アクセントの体系とその特徴を明らかにし、複合アクセント規則を明らかにしようとしている。上野原市方言の複合名詞では、尾高型の語は構成要素のアクセント結合部かその1拍後にアクセント核がくるという規則が適用されることを明らかにしている。先行研究で指摘されている3拍語に中高語が多いこと、東京では頭高型である語が中高型で発音されることについても丹念に追跡調査している。

本研究で注目される点は、従来のアクセント研究が類別語彙中心であったことにくらべ、複合名詞や複合動詞に着目して調査している点である。類別語彙のアクセントは、型やその対応や所属する類という情報がレキシコンに書き込まれていて、それに何らかの規則が適用されるということは少ない。しかし、複合語には表層化する際にいくつかのアクセント規則が適用されると考えることにより、方言に特有のアクセント規則を書くことができる。その規則の一般化が課題であるが、平凡な地域のアクセントの丁寧な記述により一般化できるアクセント規則が書ける。それを視野に入れた点が優れた研究の萌芽を感じさせる。

複合名詞、複合動詞のアクセント規則は東京式アクセントの中の地

域差を示す基準となるもので今後の方言アクセント研究に貢献する発想として期待できる。

さらに、東京都内での詳細な調査研究を進めようとしている点が今後この研究の発展を期待させる。

本研究はこのように優れた点をもっているが、前提となっている首都圏方言、アクセント体系、東京アクセント、東京アクセントの古相という研究の基礎的な述語に対する検討がまだ十分に尽くされていないとは言えない。本論文の研究の基盤が臨地調査に基づく実証的研究から出発しているため、これらの概念の理論的補強が今後の課題である。

申請者自身が述べている如く、本研究を通して首都圏方言ひいては日本語アクセント研究にたいする多くの研究の発展の可能性がみえてきたことは確かである。首都圏方言という述語一つ取ってみても、まだまだ学界で共通の認識や理解がえられていない。申請者自身の見識をさらに深めていくことが期待される。また大都市圏に起きるであろう言語変化にたいする新しい方言研究の提言につながるであろう。

以上の結果、本論文の提出者三樹陽介は博士（文学）の学位を授与される資格があると認められる。

平成25年2月15日

主査 國學院大學教授
副査 國學院大學教授
副査 國學院大學教授

久野 マリ子 ㊞
大久保 一 男 ㊞
諸 星 美智直 ㊞